

## 大学院年報の発刊にあたって

学長・研究科長 武田 雅俊

大阪河崎リハビリテーション大学（Osaka Kawasaki Rehabilitation University; OKRU）は、2006年4月にリハビリテーション専門職（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士）の養成を目的として、リハビリテーションの名称を冠した我が国最初の大学として開設された。そして、16年間の実績を積み上げて、2022年4月に大学院リハビリテーション研究科を開設した。

大学院設置基準によると、修士課程とは、「広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うこと」とされている（大学院設置基準第3条第1項）。大学院設置基準の要件を満たすべく、本学リハビリテーション研究科のディプロマ・ポリシーは、以下のように設定した。①リハビリテーション学分野における高度医療専門職業人として、リハビリテーションの発展に寄与することができる。②リハビリテーション学分野における幅広い学識と倫理観を有し、地域もしくは臨床の場で指導的な役割を果たすことができる。③地域リハビリテーションにおいて企画・提供・マネジメント等にも貢献することができる。④認知症を取り巻く予防も含めたリハビリテーションや支援を推進することができる。⑤修得した専門知識を教育・研究・臨床に生かし、リハビリテーション学及び関連領域の発展に寄与することができる。本学リハビリテーション研究科のディプロマ・ポリシーを解りやすく言えば、リハビリテーションに加えて認知機能や認知症の学識を深めて、広い視野をもった教育・研究・臨床に生かし、地域リハビリテーションという専門的職業を担う卓越した能力を身につけてほしいというメッセージである。

本学リハビリテーション研究科では、教育目標として以下の三項目を設定している。

- ①地域保健・医療・福祉の課題を解決するための地域リハビリテーションシステムの構築や人材育成を推進するリーダーとしての役割を担えるリハビリテーション療法士を育成する。
- ②認知症の人と家族に対する最適のリハビリテーション・サービスを提供するために、リハビリテーション学における高度な知識と技術を有し、チーム医療のキーパーソンとして他の医療専門職者と連携・協働して活躍することができる高度実践リハビリテーション専門職者を育成する。
- ③リハビリテーションの効果を高めうる認知機能を理解し、それを活用できるリハビリテーション療法士を育成することのできる教育者及びリハビリテーション学の発展に貢献できる研究者を育成する。

本学リハビリテーション研究科は2022年4月に4名の大学院生と共にスタートした。理学療法士（3名）、言語聴覚士（1名）として働きながらの大学院生であるが、いずれの院生も熱心に講義に参加し、前期では、認知症と認知機能の知識、英語や統計のスキルを身につけた。特筆すべきは、新田香織先生、ジュディ野口先生、深山晶子先生による医学英語の成果であった。筆者も医学英語の最終授業に参加させていただいたが、4人の院生が堂々と英語でのプレゼンテーションをこなしている姿を見て驚いた。入学試験における英語の成績を知っている者としては、わずか半年の英語教育でこのような成果を上げられるものかと感動さえ覚えた。そして、大学院生はそれぞれの指導教員と相談して特別研究計画書の審査を終えて、後期からは調査研究のデータ集めに参加している。教員として、若い世代の大学院生に接することができることは無上の楽しみであり、研究・教育に携わる教員の最大の特権であろうと思っている。このような喜びと楽しみを記録しておきたいとの考えから、研究科委員会に諮り、最初の年度から大学院年報を発刊することになった。

大学院年報では、研究推進に役立つ内容を心掛けた。本学では研究科の前身として認知予備力研究センター（Cognitive Reserve Research Center; CRRC）が設置されており、定期的にCRRCセミナーが開催され、毎月のCRRCたまりが発行されてきたので、これらの記録を収録した。また、本学では大学院開設に先立ち、英文学術誌「Cognition & Rehabilitation」が刊行されており、その3年分の和文抄録を掲載した。加えて、共同研究機器の説明、大学院生自身による施設や研究内容の報告、教員や大学院生の学会報告、他大学の大学院報告などを収録した。

研究科設置二年目の入学希望者は7名となりそうである。このことから見ても、本学リハビリテーション研究科への社会の期待は大きいと感じている。現時点では入学者を、理学療法士、作業療法士、あるいは、言語聴覚士の資格を有する人に限っているが、このような研究科に対する期待の大きさを考えると、近い将来には、入学者の門戸を拡大していくことも考えてみたい。